

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

俳人高橋飄々子の世界

田村 悌 夫 (当センター協力員)

俳人高橋飄々子は、大正4年3月14日、佐波郡防府町大字三田尻村1782番地（現防府市自力町）の地主の旧家に生まれる。本名孝太郎。

俳句は昭和16年冬の26歳頃から、近所の又田竹栖らと「鞠生句会」をつくり作句の道に入る。その後昭和19年に応召して中国に渡り、肺結核で入院中に「雨雀句会」をつくるが、内地送還となる。

広島陸軍病院を経て豊北町（現下関市）の同病院小串分院で療養生活をおくる。この分院で「松籟俳句会」を分院長らと創設。同年12月、小串分院に講演にきた医師でホトトギス系俳人本田一杉の門下となり、以後本田主宰の俳誌『鳴野』を中心に発表。

終戦直後の昭和20年11月、自宅で竹栖らとふたたび句会をはじめ、俳誌『ちかや』（茅萱）を創刊。昭和22年、2月号を以て『ちかや』廃刊。同年10月、あらたに一杉指導のもとに飄々子主宰の『嵐』を発刊。

昭和24年6月、本田一杉急逝。飄々子は、これまで「リアリズムとロマンチズムの統一の上に立つ象徴俳句の希求」を主張し取り組んできたが、師一杉死亡後、一つの峠を越えようとして、水原秋桜子や山口誓子、県内では山崎青鐘らの新興俳句の影響を受けはじめる。その一方で有馬早々子を通じて飯田龍太の『雲母』や、大中青塔子（祥生）が所属していた『青玄』にも関心をはらい、各派の長所を吸収し、人間的な光を求めながら偏らない世界観的思想と、強靱な意志をもって「夢と現実」を追求実践した。その作風は近代俳人の対岸にあるものであった。

しかし、時折見せた豊満なる女性句（エロチシズム）には驚かされるが、飄々子からすれば、上品で厄介で無頼めいた自身のカテゴリーの中であろう。

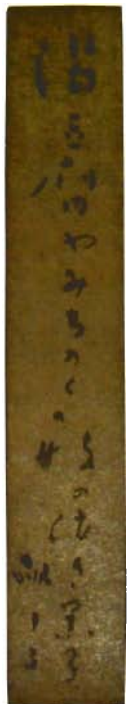
湯豆腐やみちのくの妓の泣き黒子 飄々子（寄贈短冊句 写真右）

上記の句は、戦後いち早く出版された新潮社の歳時記に載ったもの。

昭和38年7月3日没。享年48歳。1周忌に遺句集『嵐』刊行。昭和44年7月、市内桑山公園に句碑が建立されている。



▲高橋飄々子肖像（昭和37年撮影）



下記対談は、飄々子夫人であられ、御本人も俳人でいらっしゃる高橋ちちり氏のご自宅へ、当センター協力員・田村悌夫氏が訪問し実現したものである。飄々子当人についてはもちろんのこと、交流関係や時代背景などがつぶさに分かる貴重な証言に満ちている。

対談 妻が語る俳人高橋飄々子

話す人：高橋ちちり 聞く人：田村悌夫
9月15日・於防府市自力町高橋宅

●飄々子との出会い

田村 この度は飄々子先生の貴重な資料を寄贈いただきありがとうございます。飄々子さんが亡くなられて今年で46年ですが、最初の出会いはどこだったのでしょうか。

夫人 主人飄々子は戦争中、中国大陸で栄養失調で肺結核にかかり、広島陸軍病院に内地送還され半年後の昭和19年4月頃、60余年前のことで定かではありませんが、小串分院に療養のため転送されました。小串分院というのは、滝部出身の化粧品の中山太陽堂中山太一社長の別荘地だったのですが、陸軍に寄贈されたと聞かされていました。



▲左から田村悌夫氏、高橋ちちり氏（本年5月、当センターにて）

この分院は、小串駅前であり、海と松原のつづくそれは素晴らしい見晴らしのよい所で、海辺に二棟の病棟が並んで建っていました。敗戦後は国立山口病院になりました。

私は萩の出身なので、希望して広島陸軍病院より転属され看護婦をしていました。

田村 飄々子さんはそこで俳句をはじめられたわけですね。

夫人 軍隊には郵便物の検閲があり、私は第二病棟の係でした。主人は毎日のように知人や家族宛に俳句を書き送っていました。聞くところによると、出征以前、昭和16年頃より又田竹栖さんたちとともに「^{まりふ}鞠生句会」をつくっていたとのことでした。そのうち分院長の耳に入り、「^{しゅうかい}松籟俳句会」として会合を許可され、主人がその指導者に指名されたのです。会員は10数名位だったと思います。毎週のように吟行するのですが、いつも私が引率者で、時には黒井方面まで出かけました。そのうち大阪より、分院長のお世話で本田^{いっさん}一杉先生（ホトトギス系俳人・医師）が俳句慰問講演にられました。主人は先生の話に感動いたし、それ以後、先生の俳誌『^{しきの}鳴野』の会員になったのです。先生の俳句は「^{きょうらい}救癩俳句」と言われていました。

田村 山口県の戦後の俳句史をみますと、多くは所謂「療養所俳句」からはじまっているのです。徳山の^{きとう}大中祥生や兼崎地橙孫もそうですし、医師では下関の西尾其桃、田布施の水田の^{ぶほら}ぶほらがそうです。療養所で仲間や医師たちといっしょにやった俳句が、退院後地域で発展していったように思っております。宇部の山崎^{せいしゅう}青鐘は療養所に教えに行っていたようです。

ところで、ご結婚の動機は飄々子さんからのアタックと聞いておりますが……。

夫人 終戦となり軍隊は無くなりましたが、私たち陸軍看護婦は、国の命令で12月末まで勤務しました。それは陸軍病院は引き続き国立山口病院となり、重傷患者の入院手続きやその他の残務整理の為

でした。しばらくして仲人さんより主人も健康状態が良くなったので、早く来てほしいとのことで、休暇を取り、昭和20年11月11日に式をあげたのです。そのため翌年1月より高橋家の人となりましたが、驚くことばかりでした。親戚や知人の引揚者が頼ってこられ、それは大変でした。

●戦後の俳句生活

田村 戦後の飄々子さんはどうしておられましたか、生活費はどうされていたんですか。

夫人 高橋家は防府の海岸近くの自力町ですが、蔵のある大地主の家で土地は福島人絹紡績(株)に売り、それが現在の協和発酵工業(株)になっています。福島人絹紡績(株)の土地代金で代替地として牟礼の岸津に田畑を求めたものの、その後長兄一郎と父重吉が相次いで亡くなり、田畑を手放すこととなり、家屋敷と借家のみ残ったようです。

家計は主人の母が握っており、主人は昼夜あかさず地元の青年や俳人を集め文学論に花を咲かせておりましたが、昭和24年に胃潰瘍で血を吐き入院し、肺結核も再発し、その後は入退院を繰り返しておりました。

田村 飄々子さんはお勤めはされなかったのですか。

夫人 戦前はグライダーの会社に勤務していたと聞かされていますが、戦後は三田尻産業社という会社を作ったのですが、入退院を繰り返すため自然に会社はなくなりました。

田村 飄々子さんの実績の一つに山口県俳句作家協会設立があげられると思いますが……。

夫人 その前に昭和23年に防府天満宮大専坊において山口県俳句大会を開催しております。その後、昭和32年に西尾桃支、山崎青鐘、大中青塔子（祥生）氏らと山口県俳句作家協会を結成しました。この会の事業の『防長俳句年鑑』第1号は大中さんですが、第2号及3号は主人が編集刊行いたしました。この会を立ち上げたため、地元の柳星甫、村田桃源洞さん以外にも有馬草々子、水田のぶほ、兼崎地橙孫さんら県下の俳人たちとも盛んに交流をしていました。

●今振り返る俳人飄々子

田村 どんな性格でしたか。

夫人 非常に短気でしたが、人間性がありました。その場その場で人を立てる人でした。

山頭火が好きで、柳星甫さんらと山頭火の句碑を戎ヶ森公園に建てたり、今は山頭火の墓は護国寺にありますが、以前は小古祖の墓地にあり、そこが道路の拡張になるといので本橋の市営墓地に移したり尽力していました。

田村 今振り返ってどんなことが印象に残っていますか。

夫人 昭和38年7月3日に48歳で亡くなりましたが、着流しの風流人で、いつも雑誌や本が渦高く積まれた書齋に陣取って、若い俳人たちと夜遅くまで喋るのがなにより好きな人でした。

草の絮きず負いのぼる天の凹み 飄々子

この句は生前句友に「辞世」にしてもよいと、ハガキに書き送ったものですが、これを拡大して7回忌に嵐同人会が、桑山公園に自宅に向かって句碑を建立されました。

田村 私は高橋家からの資料提供により、「俳人飄々子」がさらに注目されていくだろうと思っております。どうもありがとうございました。

寄贈図書

古書里艸『古書目録77』『古書目録78』『古書目録79』（古書里艸、2009年）・岡村和美『河内淑子遺歌集「灯のこゑ」』（岡村和美、2004年）・中田潤一郎『あしび亭物語』（山口県文芸懇話会、1989年）・中野真琴『身辺小説集』（溪水社、1996年）・太田静一『中原中也「在りし日の歌」全釈』（鳥影社、1997年）・太田静一『中原中也の詩と眞実』（山口県文芸懇話会、1972年）・山本勉弥『萩俳諧史』（萩文化協会、1952年）・山本勉弥『萩の歌人』（萩文化協会、1956年）・山口女子大学『花蕊』（山口女子大学、1981年）・せいきたかし『句集 一片の雲』（東京四季出版、2009年）・河村正浩『句集 桐一葉』（文学の森、2009年）・児玉武人『鎮魂歌』（文芸社、2009年）・上野さち子『女性俳句の世界』（岩波新書、1989年）

寄贈雑誌

『神戸女子大学 古典芸能研究センター紀要』2（神戸大学古典芸能研究センター）・『思文閣古書資料目録』212、213（思文閣出版古書部）・『にぎめ』24（豊北郷土文化友の会）・『文芸山口』285-287（山口県文芸懇話会）・『其桃』774-779（其桃発行所）・『ほうふ図書館だより』246-251（防府市立防府図書館）・『自由律俳句クラブ群妙』4、6（自由律俳句クラブ群妙）・『颯』81-82（颯文学会）・『防長春秋』15（防長春秋）・『歯車』31（歯車の会）・『中原中也記念館館報』12（中原中也記念館）・『郷土資料新着ニュース』41、43（山口県立山口図書館）・『図書館年報平成20年度』2008（防府市立防府図書館）・『大内文化探訪』27（大内文化探訪）・『合同年刊句集すばる』44（すばる俳句会）・『風響樹』38（風響樹同人）・『あらつち』487、507、523、530、536、537、542、561-563、574、577、578、598、602、609、616、622、624、626-651（あらつち社）

編集後記

▼センターだより14号をお届けします。▼今号は、郷土の俳人・高橋飄々子特集としました。12号本欄でお知らせしました通り、御遺族から当センターに貴重な関係資料が寄贈されました。そこで、飄々子ひいては山口の俳人に造詣の深い田村悌夫氏（当センター協力員）に、飄々子のプロフィールや俳人としての文学活動について原稿をお寄せいただきました。文学者としての飄々子の肖像が浮かび上がります。▼さらに、飄々子夫人である高橋ちちり氏と田村悌夫氏との対談も掲載することができました。生前の飄々子の姿が眼前に現れるかのような内容であり、さらにそれを支えたちちり氏の存在、当時の高橋家を取り巻く諸相が極めて鮮明に知られます。話が山口の戦後俳句界の特色に及ぶ点など、インタビュアーの力によりとても興味深い内容となっております。快くご協力くださった高橋ちちり氏に誌面を借りて心より感謝申し上げます。▼今年度の公開講座は無事終了いたしました。来年度は、県立図書館との共催に向けて準備中です。ご期待ください。（K）



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜島3-2-1）
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2009（平成21）年11月20日